文化の交差点

bunka to bunka no kousaten

2023年芒種号

contents

サークル見聞録

舞台美術研究会 2023年度
春季研究会公演『それだけ。』 p 1

早大劇研 '23新歓公演『Scrap 'n' Build』 p 2

マンドリン楽部 第209回定期演奏会 p 3

劇団木霊2023年本公演 『牡牛座の群島』 p 4

エッセイ

句に込めた不屈の精神
戦火のウクライナを詠む p 5

「文化の交差点」2023年芒種号
発行日:2023年6月12日
発行者:「文化の交差点」編集委員会
代表・神原（教育4年）

連絡先:090-2331-4456
waseda-bunren@hotmail.co.jp

サークル見聞録

舞台美術研究会 2023 年度春季研究会公演
「それだけ。」を観て

（5月5～6日　@学生会館B203）

事故死してしまった主人公のその後の生活と心の葛藤を描き出す、斬新な演劇でした。死後の世界というと人は様々に想像をめぐらすと思いますが、ここでの主人公の死後世界は生前と同じように家で暮らすことができ、大学に通い就職することもできる世界。ただし、死後の生活をサポートする自治体職員に「生きた証」の提出を求められ、主人公は必死に探すのだった...

主人公が「生きた証」を見つけるために自分の半生を振り返り、辛い過去を次第に思い出してゆく過程に深みがありました。いじめに遭った同級生の女の子を助けられなかったことに「僕は一度死んでいたのかもしれない」という彼の言葉が、強く印象に残っています。たとえ明確な証拠が見つからなくても、自分の過去と向きあい、迷いながらも心の整理をつけていく過程そのものが、とても大切だったのではと思います。

舞台美術は冷蔵庫や水道、棚など主人公が生前に暮らしていた部屋の空間を絶妙に表現していました。とくに水道が生活感が出ていて良かったです。照明は、回想シーンに合わせて光が点滅を繰り返していく場面が印象的でした。また主人公の生活空間を仕切り、その前の空間で机を持ち運ぶなどして回想シーンを演出していく場面転換もとても良かったです。仕事に追われる自治体職員の心の嘆きはリアルでした（笑）。（杏あんみつ）

早大劇研‘23新歓公演

Scrap ‘n’ Build

（5月11日～14日　大隈講堂裏劇研アトリエ）

今回の劇研の公演は４本の短編を１ステージ３本ずつ上演するという意欲作。私は初日に観に行った。

ブラックなテーマを軽妙な笑いに包んだ『へその緒』も、演劇の「面白さ」をめぐるシリアスな会話劇『ある大学の、小さな劇場に、草が生えることについて』も良かったが、ここで取り上げたいのは『燃えよ私のマルゲリータ！』。

冒頭のミュージカルシーンから、一気に魔法が支配する異世界に引き込まれた。お城が爆発するシーンのスローモーションは圧巻。まるでリアル・「マトリックス」。エンターテイナーの面目躍如、文句なしに楽しめる作品だった。

あらゆる手で目の前の観客を徹底的に楽しませる――時代に媚びない劇研らしさは健在。次回公演も期待しています。

（文連スタッフ　初鰹）

次回公演は…

早稲田大学演劇研究会‘23 新歓公演

走れメルス

少女の唇からはダイナマイト！

脚本　　野田秀樹
潤色・演出　佐織祥伍
6 月 15 日（木）～ 19 日（月）
早稲田大学大隈講堂裏劇研アトリエ
料金自由設定制（フリーカンパ制）

サークル見聞録

早稲田大学マンドリン楽部
第209回定期演奏会を聴いて

（5月14日 川口総合文化センター　リリア　メインホール）

今回はⅠ部で「和」、Ⅱ部では「ジャポニスム」の影響を受けたドビュッシーの作品への挑戦という、ユニークで意欲的なテーマを掲げて演奏が行なわれました。

前半から、日本的な旋律や風景が描かれた曲目が演奏され、ぐいぐいと音の世界に引き込まれます。湧き水の一滴から沢となり川となりやがて海に注ぎ込むように厚みを増す音の重なりや、荒々しい滝のような力強くも静かな表現もあり、和楽器ではない楽器による「和」の世界に包まれました。

これをうけていよいよ後半は、ドビュッシーの交響詩「海」の演奏です。この作品が葛飾北斎のあのダイナミックな「神奈川沖浪裏」にインスピレーションを受けて作られたことをパンフレットの解説に教えられながら、そういえばゴッホやルノワールも浮世絵に影響を受けていたよな…などと思いつつ耳を傾けます。聴こえてきたのは、さまざまに変化する海の色、波と風、降り注ぐ陽光や嵐を、作曲家が音で描いてみせた風景でした。なにより素晴らしかったのは、それをはっきりと浮かびあがらせたマンドリンオーケストラの一体感のある演奏です。一人ひとりがドビュッシーの海への想いを感じ情景を思い浮かべながら、作曲者との対話を重ねたであろうことが垣間見える充実した演奏だったと思います。拍手。

帰途につくころには、マンドリンの演奏会を聴いていたのに同時に美術館で過ごしたあとのような、あるいは一冊の詩集を読んだあとのような豊かな気持ちでいっぱいになったのでした。　（海の泡）

早稲田大学マンドリン楽部　創立110周年
第210回記念定期演奏会
8月12日（土）　開場12:30　開演13:00
浅草公会堂　入場無料

〈お問い合わせ〉Email: waseda_mandolin@yahoo.co.jp

劇団木霊2023年本公演

『牡牛座の群島』を観て

（5月18～21日　@劇団木霊アトリエ）

太陽の光が弱まり、砂漠化が進行する島――根が断ち切れるたびにそれぞれの配置が変わり人々の記憶が消えてしまうその群島で、登場人物たちは言葉を紡ぎ、太陽と牡牛がいるとされる島を求めて旅をする…役者のみなさんが発する言葉の一つ一つに透明感がありました。表情もとても生き生きとしていました。

とくに印象的だったのは、冒頭で女性が「誰かいますか？」と暗闇に向かって叫ぶ場面。それと、話の後半で登場人物の二人が外の「景色」や「音」を拾いながら暗闇の中の階段を降りてゆく場面。圧倒的な暗闇の存在を感じさせながら、そのもとで言葉を丁寧に繋いでゆくことで、牡牛の心臓の音や外側の景色へと私の心も自然と向かっていきました。「ひ」と「しま（ほし？）」の油が飛び出る空間で交わされた会話も、神秘的でかっこよかったです。

最後に海が空へと向かい、群島がひと繋がりの陸へと姿を変える場面は見事で、心がすきっとしました。「見る」だけでなく、そこにある何か生きたものを「聴」いたり「感」じたりすることの面白さや楽しさを味わうことができたなと思います。舞台美術もとても綺麗でした。照明も衣装も世界観が良く出ていました。（みかん大福）

Essay Essay

句に込めた不屈の精神　戦火のウクライナを詠む

戦火のまっただなかにある十三人のウクライナ人が詠んだ句集「紅色の陽」が、ロシアによる侵略開始から一年を経て発刊された。編者は昨年六月に日本に避難し、現在は東京大学客員研究員のガリーナ・シェフツォバさん。

ウクライナには三行詩の伝統があるが、松尾芭蕉や与謝蕪村の句が翻訳され広まると、この三行詩を「俳句」と呼ぶようになったという。

句集から一句。〈二つの戦争　同じ恐怖　古い地下室が守る〉

作者はウクライナ北部イルピン在住のリディア・コレスニチェンコさん（八七歳）。昨年二月の開戦直後、イルピンにはロシア軍が侵攻してきた。地下室に避難するなか、リディアさんは八十年前のナチスドイツによるソ連侵攻の記憶を呼び覚ましていた。あの時もここに逃げたのだと。

同じくリディアさん作。〈サイレンと　地下壕の間に　梅の花〉

「どんなに悲惨な状態でも梅は咲く。命は続く。春は来る」。そんな思いを句に込めたという。

句から伝わる不屈の精神を感じるにつけ、日本の賢しらなメディアや「研究者」が口にする「早く停戦した方が犠牲は減る」といった言葉がひどく薄っぺらなものに感じる。

最後に私も、ロシア軍にたいする反転攻勢にうってでているウクライナの人々に思いを馳せ、駄句を一つ。

異国（とつくに）の　支配に抗う　麦穂波
暴虐に　耐えて蝸牛の　歩みかな
兵の　血潮となりし　ボルシチや
麦秋の　空にはためく　青黄色
踏まれても　屈せざらんや　麦のごと

（国際問題研究会会員　紫蘭）